山陰中央新報　2020年（令和2年）6月20日（土曜日）　（第3種郵便物認可）

ヤングこだま

特別編

浜田医療センター付属看護学校

毎週日曜日付の「ヤングこだま」欄では、5月24日付から6月14日付までの4回にわたり、浜田医療センター付属看護学校の学生さんの投稿16編を掲載しました。これらを読んだ同校の担当、担任の先生、同校教育主事の3人の方からも投稿が寄せられました。「ヤングこだま」特別編として掲載します。

教え子の投稿を読んで

実践の中にこそ大きな学び

教育主事　高下智香子

浜田医療センター付属看護学校は昭和28年に開設し、今年で68期目の入学生を迎えた。現在、島根県内には3年課程の看護専門学校は4校あるが、病院を母体とするのは本校のみとなった。本校の魅力は、学校と病院とが一体であり、看護・医療の現場を身近に感じられる臨地実習のフィールドを持っているところにあると思う。

「ヤングこだま」に掲載された学生の声には、臨地実習を通して感性が磨かれ、思考を深め、学習し成長している姿が感じられ、教員として大変うれしく思った。また、専門的知識を身に付けるための勉強は大変だという声も多く聞かれた。

でも、大変な中でも頑張れるのは関わる相手が患者さんだからこそ。臨地実習では、講義中心の時期には触れることがなかった患者さんに真摯（しんし）に向き合う学生の別な側面を垣間見ることができる。実践の中にこそ学びがあり、改めて臨地実習の重要性を感じる。

学校がある島根県西部の浜田市は超高齢化、人口減少、過疎化の問題が深刻で、多くの無医地区もあり、医師とともに看護師の確保も課題となっている。少子化や大学、都会志向の若者の増加から、入学生の減少も本校の大きな課題である。

これらのことを踏まえ、これからは生まれ育った地域をよく知る人材が地域の看護を担う時代だと思う。島根県内、浜田圏域を中心に本校に入学してきた若者が、慣れ親しんだ地元を愛し、地域の人たちに育てられ、地域に根差す看護師に成長していくよう、微力ながら手助けしていきたいと思っている。

臨地実習に向けて環境整備

67期生1年次担任　福嶋　洋子

3年課程の看護専門学校である本校では、1年次に看護の基盤となる解剖生理学や疾患・治療・検査、基礎看護技術などを学びます。1年次のカリキュラムは講義や演習が多いですが、実習では基礎看護学実習1が45時間あり、5月末の2日間と1月末の5日間、浜田医療センターで看護の実際を学びます。模擬患者演習などもありますが、臨床の実習で学ぶことは数知れず、教材の宝庫です。

学校生活1年を終えたむと、実習を通して患者さんのニーズに応じた援助やコミュニケーションの重要性、看護師という職業の素晴らしさ、看護師になるための自己研さんの必要性などを学んでいます。

学生たちは実習において目標に沿った学習内容はもとより、潜在的なカリキュラムからも多くの学生たちのリポートを読み、学生活1年を終えたことを学んでおり、学生の可能性は無限大だと感じています。同時に、私自身も看護教員としてのあり方について振り返る機会をいただき、身の引き締まる思いです。

67期生は現在2年生になり、新型コロナウイルスの影響で5月は自宅で遠隔授業を受け、分散登校のため6月ごろから再び登校し、9月からは臨地実習が始まる予定です。本年度は臨地実習の機会が縮小されつつありますが、できる限り多くの患者さんやその家族、病棟スタッフの方々に触れる機会を持ち、看護をする楽しさややりがいを感じてほしいと思います。

また、学生が看護師としての基本的能力を身に付け、臨地実習でかけがえのない体験ができるよう学習環境を整えていきたいと考えています。

目を見張る学生たちの成長

講師　田渕　直子

私は一昨年まで養護教諭として浜田市内の学校で勤務してきたが、平成18年に看護学校での「小児保健」の講義依頼があり、浜田市教育委員会から教育公務員兼職辞令をいただき、今も微力ながら地域医療を担う人材育成に関わっている。今回「ヤングこだま」欄に掲載されたのは、私の講義のまとめとして「学校生活1年を終えて」というテーマで、2年生が1年次に書いたリポートだ。

看護師免許を持つ私が学校を職場に選択したのは、学校保健を予防医学の第1ステップと捉えたからだ。食育、心の教育、性に関する指導、保健教育と指導、虐待や発達障害など、学校保健で取り組んでいることを話しながら、学校と医療の連携、医療従事者としての共通理解も図っている。

私が講義を受け持つのは1年生の3学期だが、その3カ月間の学生の成長には目を見張るものがある。医療職を志す素直な感性にあふれたリポートに思わず涙することもしばしばだ。

もうすぐ創立70周年を迎える看護学校は浜田の宝。浜田医療センターで働く職員だけでなく、病棟実習に来る看護学生の明るい笑顔に、入院患者やその家族はどれだけ心を癒やされてきたことか。また、このたびのコロナ禍では、医療従事者の存在の大きさを誰もが再認識したと思う。

専門学校だが大学並みの教育をと、先生方も熱心に努力されている。少子化や大学志向の進む中、浜田医療センター付属看護学校のさらなる発展を願うとともに、医療職を志す学生たちとの新しい出会いを心待ちにし、浜田での学生生活を応援したいと思っている。